高大接続

北海道教育大学函館校　地域協働推進センター
教育協働部門長　奥　田　秀　巳

ここでは今年度の地域協働推進センターにおける「高大接続」事業について、その一部を紹介したい。

近年進められてきた「高大接続改革」とは、簡潔に言えば高等学校・大学入試・大学の3つが一体となった教育改革を指している。この「高大接続改革」に関連することとして、高等学校では、2022年度の入学生から新学習指導要領に沿った授業が実施されることとなったが、これに対応して大学入試においても、2025年度入試からは、この新課程に対応した入試が行われることになる。

この度の高等学校の新課程において、学校現場が対応を求められているものの一つとして、従来の「総合的な学習の時間」から変更となった「総合的な探究の時間」が挙げられる。とりわけ新課程において「探究」の言葉は、この「総合的な探究の時間」だけでなく、国語科における「古典探究」や、理数科における「理数探究基礎」、「理数探究」などの科目などにも見ることができる。「探究」という営みが高等学校における様々な学びの場で取り入れられようとしているわけである。

だがもし「探究」が、実際の教育実践において生徒の資質・能力を育む学びを伴うものとならないのであれば、その言葉はお題目に過ぎないことになるだろう。特に生徒の主体的な問いを軸にして教科横断的に学びを深めていく「総合的な探究の時間」においては、教師のサポートが、生徒が探究を深めていく上で不可欠となる。高等学校の先生方は、ときに強い興味関心を伴いながらも、漠然とした問いを掲げて探究を深めようとする生徒に対して、どのような支援をしていけばよいのか苦慮しながら実践を続けているに違いない。

実際に高等学校の教育現場に足を運んでみると、「総合的な探究の時間」に関して、これまでの教育課程における実践を活かしつつ、「探究」を具現化しようと、様々な試みがなされていることが見て取れる。2022年10月には筆者も地域協働推進センター員として、本校の松浦俊彦教授が指導員として関わる函館中部高等学校（以下「函館中部高校」）の探究活動を観察する機会を得て、これからの高等学校における「総合的な探究の時間」における学びの可能性を見ることができた。

スーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受ける函館中部高校では、「科学的リテラシーを備え、地域及び世界をイノベイトする科学技術人材の育成」を目指している。実際に生徒の探究活動の様子を見ると、生徒はICTを活用しながら情報を収集して自ら問いを設定し、科学的アプローチについて理解を深めつつ、探究を進めようとしている姿を見て取ることができた。今後もこの函館中部高校をはじめとして、高等学校における探究活動について、函館校の教員、学生及び地域協働推進センターとの連携の中で、生徒の資質・能力を育む教育実践のあり方を模索していくことが期待される。

その他の高大接続に関わる特徴的な試みとしては、2022年12月17日に地域協働推進センターが主催し、函館市の共催のもとで実施された「インクルージョン＆ダイバーシティプロジェクト」が挙げられる。その詳細については本報告書6章「地域共生社会づくりワークショップ」（P59）を参照していただくとして、イベントでは、車いすラグビーチームの「SILVERBACKS」の協力のもと、函館市内の高校生や高等学校の教員も参加し、パラスポーツを題材に、地域共生社会の実現のあり方について考えを深めることができた。イベントに参加した高校生や教員にとっては、体験と対話を通して、上述した「探究」につながる学びの一端が見えるイベントとなったように筆者には感じられた。

これらは筆者が知るところの「高大接続」に関わる活動の一部である。函館校及び地域協働推進センターの関わる「高大接続」事業が、今後の道南地域の教育にどのような影響を及ぼすのか、筆者自身も期待しながら、それに関わっていきたいと思っている次第である。

「インクルージョン＆ダイバーシティプロジェクト」ワークショップの様子

令和4年12月27日　北海道新聞（夕）10面

車いすラグビー「距離縮まった」

函教大イベント 高校生ら共生考える

大学生や高校生がパラスポーツを体験しながら障害者との共生を考えるイベントが、函館市総合福祉センターで開かれた。

道教大函館校の地域協働推進センターが主催し、17日に開催。同校の学生や市内の高校生ら27人が参加した。札幌の車いすラグビーチーム「シルバーバックス」の現役選手、本間篤史さんを講師に招いた。

本間さん（手前中央）と一緒に、ゲームで競技用車いすを体験する参加者たち（藤井泰生撮影）

競技用車いすに乗った参加者は、素早く動き回る本間さんを追いかけ取り囲むゲームに挑戦。車いすで本間さんと正面からぶつかるタックルも体験し、車いすラグビーの激しい動きを実感した。

続いて参加者はパラスポーツの魅力や、障害者との接し方について話し合った。函館西高1年の小沢優人さんは「障害者に対して身構えていたけれど、スポーツで一緒に盛り上がって、距離が縮まったように感じた」と話していた。

（梶蓮太郎）